

令和元年6月19日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16686

研究課題名（和文）中世文学における音楽研究試論 書物の枠組から見た雅楽史の究明

研究課題名（英文）The study of music in medieval literature, Investigation of the history of Gagaku from the viewpoint of bibliography

研究代表者

猪瀬 千尋 (Inose, Chihiro)

名古屋大学・人文学研究科・研究員

研究者番号：10723653

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：国文学における書誌の視点を軸として、雅楽史の究明を行った。諸目録からデータ抽出を行い、未詳とされてきた資料を発見した。歌謡の家における書物の移動を明らかにし、音楽伝承と書物伝来の関係性を示した。聖教の分析を通し、ダキニ天法のテキストを紹介し、『古今著聞集』との関連を明らかにした。現存唯一の今様琵琶譜を発見し、詞章および旋律の分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

書物の原態を探るのみでなく、書物を受容していた人びとの関係や、書物伝来の場を明らかにする方法は、新たな書誌学の観点を切り拓くものであり、人間と書物という永続的なテーマに革新的な視座をもたらすものである。

また本研究の過程で発見された今様琵琶譜中の歌謡「足柄」は、これまでその歌詞についてほとんど明らかになっていなかったものであり、中世文化史の解明の大きな一歩となるものである。楽譜分析より旋律が復元できれば、およそ800年ぶりに幻の音色が再現できることになり、社会的なインパクトは決して少なくないものと思われる。

研究成果の概要（英文）：I investigated the history of gagaku mainly from the viewpoint of bibliography in Japanese literature. Data was extracted from various catalogs, and unknown materials were found. I clarified the movement of books in the houses of songs and ballads, and showed the relationship between the transmission of music and books. Through the analysis of Syogyo, I introduced the text of Dakini-Ten practice and clarified the relation with 'Kokon Chomonju'. I found the only existing Imayo Biwa notation, and I analyzed the verse and the melody.

研究分野：日本文学

キーワード：雅楽 楽書 今様 説話文学 芸能史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

雅楽史(ここでは荻美津夫『日本古代音楽史論』(1977年)に基づき、雅楽を宮廷音楽一般の総称とする)における文献学的研究は、林屋辰三郎『中世芸能史の研究』(1960年)によって大成された。林屋は、中世芸能史の解明には古代からの考察が必要不可欠であるとし、雅楽においても、古代から中世の接続をもって、その歴史を考察した。林屋の研究はいくつかの修正を経ながらも、荻美津夫『古代中世音楽史の研究』(2007年)らによって引き継がれ、現在でもなお研究の軸をなしている。また近年では豊永聡美『中世の天皇と音楽』(2006年)によって平安中期～鎌倉期の雅楽が、三島暁子『天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史』(2012年)によって室町期の雅楽が、主として音楽儀礼の分析を通して考察されている。

如上の研究によって、雅楽史は多方面からとらえられるようになったが、一方で研究者の絶対的な少なさもあり、文献と目録の未整理などの問題を内包している。

2. 研究の目的

以下の三つの時代の分析を通し、書物と音楽の関係を明らかにする。

(1) 平安末～鎌倉期

藤原師長(1138-1192)によって雅楽、声明のあらゆる流派が統合される。それゆえ、師長の影響を強く受ける鎌倉期の雅楽文献は、仏教と密接な関係にある。師長周辺の文献、声明類の翻刻分析を通し、音楽における仏教思想、雅楽と仏教の連関について明らかにする。

(2) 南北朝～室町前期

雅楽が衰退傾向にある一方、音楽を専門とする家の中で、部類記の編纂や、家を越えた書物の伝来が行われるようになる。同じ書写者や書写経路を持つ文献を翻刻分析することで、書物と人間にまつわる様相を明らかにする。

(3) 室町中期以降

応仁の乱以前の雅楽と、応仁の乱～江戸期の復興以後の雅楽を、書物群から比較する。

3. 研究の方法

(1) 基礎資料の整理

各文庫、寺院に所蔵される音楽関係の調査研究を行う。また旧蔵目録や古書売立目録などからもデータ抽出を行い、中世における楽書の全体像を探る。

(2) 歌謡の家に関わる書物の研究

一つの事例研究として、綾小路家に注目する。綾小路家は、催馬楽、朗詠、和歌被講など野曲(歌謡)に携わった羽林家クラスの家である。御遊、御楽、内侍所御神楽、殿上淵酔などの儀礼およびその儀礼を記した書物の分析を通し、芸能伝承と書物の関連を明らかにする。

(3) 寺院聖教に関わる書物の研究

日本の寺院(文庫)には、聖教と呼ばれる多種多様な経典、典籍の体系がある。このうち特に音楽に関わる聖教について調査翻刻を行い、聖教の伝来と音楽との関連を明らかにする。

(4) 伏見宮旧蔵楽書の研究

書陵部蔵の伏見宮旧蔵本には、琵琶を中心として様々な楽書が存在する。書誌調査を踏まえながら、伏見宮旧蔵本についての実態を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 基礎資料の整理

機関としては書陵部、尊経閣文庫、茨城大学菅文庫、金沢市立図書館加越能文庫、京都文化博物館等で調査を行った。目録からのデータ抽出については、書陵部蔵『諸家蔵楽書目録(大原目録)』を中心として、金沢市立図書館加越能文庫蔵『持明院殿蔵書目録』、内閣文庫蔵『楽書目六』、藤貞幹『秘蔵書目』などから行った。ほか史料編纂所所蔵の目録等も参照し、『潜龍閣楽書目録』『野宮家蔵書目録』『徳大寺家旧蔵書目録』『文科大学古書謄写費了写書目』『古義堂蔵書目録』『披雲閣蔵書目録』『豊宮崎文庫蔵書目録』『惟揚庫書籍目録』『押小路公亮借書目録』『狩野亨吉氏所蔵書売立展覽目録』についても調査した。

また鹿田松雲堂の『書籍月報』や、『弘文荘待賈目録』、美術倶楽部の売立目録、また好古社主催による好古会の目録(『好古類纂』『好古事彙』などに所収)、各研究機関による陳列品目録(『雅楽及声明図書展覽目録』『音楽文化資料展覽会目録』など)も参照した。

調査の過程で、村田正志が「後村上天皇の琵琶秘曲相伝の史実」(初出1963年)で紹介した

「琵琶秘抄」なる史料についての由来が判明したため、その点について『HERITEX』誌上で報告を行った。

(2) 歌謡の家に関わる書物の研究

綾小路家の楽書について、調査研究の結果、次の伝来過程が判明した。

綾小路家は十六世紀初頭、俊量の息子・資能に代に廃絶するが、それ以前、俊量が持明院基規に秘説の伝授を行っていたため、綾小路家から持明院家へ文書が伝来していた。その後、持明院家は郢曲の家として存続し、その書物群は明治維新後、猪熊信男に渡し、現在は広島大学に「持明院家楽文書」として伝来している。

一方、綾小路俊量から秘伝を受けた持明院基規の子・基孝は五辻家の之仲に秘伝を受けている。この時の相伝文書の写しは内閣文庫に蔵されている。そして之仲の息子・高有が、ふたたび綾小路家を名乗り、それが現在まで続く綾小路家の起源となった。

持明院家の資料はさらに十七世紀後半、基時の代に、松雲公・前田綱紀に提供されている。当時、綱紀は全国の書物の書写編纂を行っており、その一貫であろう。特に書写は元禄三年(一六九〇)と十二年に集中している。また前田綱紀の編にかかる『秘笈叢書』にも持明院家の資料が収められ、本書は現在失われたが、森田平次編『松雲公採集遺編類纂』(加越能文庫蔵)によってその一部をたどることができる。

以上の成果について、2015年度の藝能史研究会で報告を行い、2016年度発行の『藝能史研究』誌上で論文化した。

(3) 寺院聖教に関わる書物の研究

如上(1)の調査過程において、音楽神である弁才天と深い関わりにあるダキ二天についての新出資料『須臾成就福德刀自女経(刀自女経)』が見つかった。本研究では当該資料の翻刻と、これと連関する『古今著聞集』の読解を行った。

『古今著聞集』第二六五話前半部は、藤原忠実が自らの願望をとげるため、「大権房」なる僧にダキ二天法を修させたところ、忠実の夢に容顔美麗なる女房が現われ、その後、願いが成就したとするものである。ダキ二天法をめぐる研究は、これまで東密のものが主体であり、『大日経疏』に見える、魂を喰らうという「荼吉尼」のイメージや、即位灌頂の本尊として、あるいは陰陽道の観点等から論じられてきた。しかし早くは喜田貞吉の『福神』(1935年)に指摘がある通り、『古今著聞集』当該話のダキ二天は「福天神」と称されており、東密のダキ二天とは性質が異なるものである。

如上の点を踏まえ、ここでは台密におけるダキ二天法に注目する。台密におけるダキ二天法については、まとまったテキストとして『溪嵐拾葉集』「吒枳尼天秘決」があるものの、そこで引用される諸書はそのほとんどが不詳とされてきた。しかしそのうちの『刀自女経』なる經典については、従来その存在が明らかではなかったが、台密において相当の流布が認められる經典である。そこに説かれるダキ二天は大白狐に乗った天女の姿であらわされ、その印明を唱える者は福德利生して止まないという。かかる本尊のイメージが『古今著聞集』のものと重なることから、当該話におけるダキ二天法は『刀自女経』に基づくものであることがわかる。

以上の成果について、2016年度の説話文学会上で報告を行い、2017年度発行の『説話文学』で論文化した。

(4) 伏見宮旧蔵楽書の研究

当初、伏見宮旧蔵本の楽書全体を調査研究する予定でいたが、途中で『諸調子品撥合譜』なる資料と出会ったことにより、計画を変更し、本資料に集中して研究を行うこととした。『諸調子品撥合譜』には中世歌謡である今様の琵琶譜が含まれている。またそのうちの三首は「足柄」と呼ばれる今様の大曲(最も重んじられる曲)であり、これまでその歌詞についてもほとんど明らかとなっていなかったものであった。

本研究では、『諸調子品撥合譜』の書誌調査を行うとともに、伝来についての分析、および詞章についての読解を行った。その結果、『諸調子品撥合譜』は三種の譜からなり、前者は藤原師長(1138-1192)の自筆譜、今様の譜を含む後二者はそれより若干時代が下る(鎌倉時代)書写であることが推定された。

また詞章分析より、足柄が囃子詞「よな」を基点として展開していく曲であること、関のモチーフ(道祖神、塞き止められる瀧など)とゆるやかに関わる歌であること、遊女などの立場から読まれた恋の歌であることがわかった。

以上の成果については、2017年度の中世歌謡研究会で報告を行い、2018年度中に論文報告を行った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

猪瀬千尋、新出今様琵琶譜 足柄三首、物様一首 「関神」「瀧水」「恋者」および「権現」について、国語と国文学、査読有、Vol.96-10、2019

猪瀬千尋、村田正志「後村上天皇の琵琶秘曲相伝の史実」と岡本貞然氏旧蔵「琵琶秘抄」について、HERITEX、査読無、Vol.2、pp262-264、2017

猪瀬千尋、『古今著聞集』管絃部二六五話の福天神縁起について ダキニ法と『刀自女経』をめぐって、説話文学研究、査読有、Vol.52、pp140-151、2017

猪瀬千尋、妓女におけるイメージの連関、日本文学、査読有、Vol.66-7、pp44-54、2017

猪瀬千尋、綾小路家の書物群と音楽伝承、藝能史研究、査読有、Vol.214、pp9-26、2016

〔学会発表〕(計5件)

猪瀬千尋、「足柄」再考、中世歌謡研究会第331回例会、2018

猪瀬千尋、消された吒枳尼—台密における諸尊の混淆、中世仏教の宗教空間と美術、2017

猪瀬千尋、Liminal Bodies: Traversals between the Sacred and the Profane、AAS(Association for Asian Studies)、2017

猪瀬千尋、『古今著聞集』第二六五話前半部について 『刀自女経』と台密におけるダキニ法をめぐって、説話文学学会大会、2016

猪瀬千尋、綾小路家の書物群と音楽伝承 神楽、催馬楽、朗詠、今様、藝能史研究会東京例会、2015

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。